様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３２６４２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２５７２

研究課題名（和文）創作システムとしての翻訳ーー複数言語と関わる現代ドイツ語作家に即して

研究課題名（英文）Translation as Creative Writing

研究代表者
新本　史斉（Niimoto, Fuminari）

津田塾大学・学芸学部・教授

研究者番号：８０２６２０８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：歴史的に複数の中心をもつ政治的伝統を有し、加えて過去半世紀にわたって社会構成に変容をもたらすほどの人口移動を経験してきたドイツ語圏においては、多文化的背景を有し、複数言語との密接な関係の中から創作活動を押し進める作家が数多く登場した。本研究では<創作システムとしての翻訳>をキーワードに、このような社会的・文化的状況を積極的に引き受けつつ創作を行った20世紀スイス文学の作家（R・ヴァルザー等）から現代の東欧文学翻訳者＝越境文学作家（I・ラクーザ等）にいたるまでの作品をとりあげ、個々の作品分析、作家研究に基づきつつ、多文化・多言語状況に内在している文化創造の可能性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、多様性に富んだ言語的・文化的伝統を持つスイスの作家（ローベルト・ヴァルザー、フリードリヒ・グラウザーなど）、さらには、多くは移民的背景を持つ現代ドイツ語圏の越境作家、とりわけ翻訳者としても作家としても活動している書き手（イルマ・ラクーザ、クリスティーナ・ヴィラーグ、テレージア・モーラ）を取り上げ、複数言語の混淆、多様な文化的背景からいかなる新たな作品が生まれうるのかについて、それぞれの作家の作品の翻訳そして批評を通して明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In German-speaking countries, where migration has brought about great social changes in recent decades, many writers with multicultural and multilingual backgrounds have received much attention. In this project, we focus on multilingual Swiss writers in the first half of the 20th century (such as Robert Walser and Friedrich Glauser) as well as more contemporary Eastern-European translator-authors (including Ilma Rakusa, Christina Viragh, and Terezia Mora) and explore their potential to create a new kind of culture.

研究分野：人文学

キーワード：ドイツ語文学　翻訳論　越境文学　ハンガリー　スイス　多言語　多文化　世界文学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

（１）本研究計画遂行者は、過去 10 年間にわたって、世界的に受容が進みつつある 20 世紀前半のドイツ語圏スイスの作家ローベルト・ヴァルザー（1878-1956）、フリードリヒ・グラウザー（1896-1938）についての研究に従事し、独・仏・伊・レトロマンの４言語を公用語に持ち、さらに多様な地方言語を持つ点で、ヨーロッパの中にあっても特殊なスイスの言語環境の中で執筆活動を行ってきた２人の作家の作品に、いかに多言語的、多声的特徴が見られるかを明らかにしてきた。

（２）加えて、このようなポリフォニックで多層的なテクストをみずから翻訳し『ローベルト・ヴァルザー作品集全５巻』（2009-2015、鳥影社、共著）等の形で刊行する実践行為を通じて、さらには各言語圏のヴァルザーおよびグラウザー翻訳者との討議における越境的な対話を通じて、翻訳と翻訳者の果たす文化伝達の役割について継続的に思考を重ねてきた。

（３）また、文化間の伝達行為としての翻訳の果たす創造的役割に関する理論的分析については、2002 年度、2009 年度の計２年にわたる、スイス、ローザンヌ大学人文学部ドイツ文学科および文学翻訳センター、チューリヒのローレン文学翻訳センターでの長期海外研修での経験を通じて、またローザンヌ大学のペーター・ウッツ教授の文学テクストに即した緻密な翻訳論『別の言葉で言えば―ホフマン、フォンターネ、カフカ、ムージルを翻訳の星座から読み直す』（2011、鳥影社）の日本語訳を通じて、さらにはクライスト、ヴァルザーの作品の諸翻訳を比較分析した諸論文の執筆を通じて理解を深めてきた。

（４）さらに並行して日本の現代詩人谷川俊太郎（1931-）とスイスの現代詩人にして方言ラップ歌手でもあるユルク・ハルター（1980-）という言語も世代も作風もかけ離れた２名の詩人の２度にわたる連詩製作の現場に翻訳者として参加し、『話す水／Sprechendes Wasser』（2012、Secession Verlag、共訳）などの二言語バージョンの書籍として刊行することで、文化的差異とその越境的交流が、単独の著作活動では有り得ない予想外の影響を生み出す現場を経験することができた。

　翻訳の創造的契機を分析しようとする本研究のコンセプトは、以上の経験の積み重ねから生まれたものである。

２．研究の目的

（１）本研究課題においては、上に記したような多言語・多文化的状況のなかでドイツ、オーストリアにおけるものとは異なる固有の作品を生み出し現代ドイツ語文学の可能性を拡大した 20 世紀スイス文学の作家ローベルト・ヴァルザーについて、その作家、作品分析の集大成を目指した。また、同時代のスイス文学作家フリードリヒ・グラウザーについては、19-20 世紀のドイツ語圏スイス文学の広い文脈の中に位置付けつつ、作品分析を行うことを目指した。

（２）この延長上で、現代のドイツ語圏において移民経験、翻訳経験を背景に持ちつつ、質の高いドイツ語文学作品を生み出し続けている現代作家、とりわけイルマ・ラクーザ、クリスティーナ・ヴィラーグ、テレージア・モーラらハンガリーからの翻訳者＝作家を取り上げ、複数の言語

体系に深く関わってきた経験が、いかなる形で新たな創造活動につながっているのかを、具体的な多言語・多文化的作品の翻訳実践および緻密な分析を通じて、明らかにすることを目指した。

（3）半世紀にわたる他者受け入れの歴史を経験し、多文化社会への転換を経験したドイツ語圏では、文化と言語の複数性に潜在する創造性を評価する開かれた体制がかなりの程度、実現している。こうした環境から生まれた作家、作品を、文学研究の手法を用いて、そのテクストの固有性に即して評価することで、現代ドイツ語文学の最先端研究であるだけでなく、今後、他者との文化的接触をいっそう深めていくことが不可避である現代日本において、文化の多様性に対して真にひらかれた理解を涵養することを目指した。

３．　研究の方法

（1）上記の諸作家の主要作品の中から、とりわけ文化・言語の混淆経験が記述対象とされるとともに創作方法そのものに生かされているものをとりあげ、それを日本語に翻訳することで、日本語を母語とする読者に、文学的越境を内側から体験可能なものとする。

（2）このような翻訳経験を根拠に、多文化・多言語経験が凝縮されているドイツ語文学作品をどのように日本語で書かれた文学作品へ移植しうるのか、その方法論について、ドイツ語圏の翻訳センターまた国際学会において翻訳者・研究者たちと議論を重ね、理解を深める。

（3）上記（1）（2）の翻訳経験、討議経験による成果に基づきつつ、当該作家たちの主要作品の緻密な分析を行い、学術論文として発表する。

（4）本研究プロジェクト「創作システムとしての翻訳」をテーマとする学会シンポジウムを開催することで、上記（3）の研究を、他のドイツ語文学研究者らによる越境文学研究、翻訳研究とともに議論の遡上に乗せ、現代ドイツ語圏における越境文学の可能性、翻訳者＝作家の創作可能性の射程を明らかにする。

（5）他分野の研究者らによる現代文学研究の論集に寄稿することで、本研究が現代における「文学の危機」において、「危機の文学」としてどのような可能性を持ちうるのか、より広い文脈において検討する。

４．研究の成果

（1）長年にわたるローベルト・ヴァルザー研究の集大成として『微笑む言葉、舞い落ちる散文』（2020、鳥影社、単著）を刊行し、ヴァルザーの散文の持つ固有の可能性、それを翻訳実践する経験、またその複数言語への翻訳の比較分析がもたらす認識、さらにはそれが広く現代文学・現代芸術に及ぼす創造的影響を明らかにした。

（2）2019年8月にはスイス、ビール市で開催されたパブリック・アート『ローベルト・ヴァルザー・スカルプチャー』において招待講演「なぜ、ヴァルザーは、日本においても、かくも重要

なのか?」を行い、ヴァルザー作品の日本語訳が日本の現代作家(小川洋子)、映画監督(三宅唱)らに与えつつある創造可能性について、ドイツ語で発表、討論を行った。

（３）2019年6月の日本独文学会春季大会(於:学習院大学)においてシンポジウム「創作システムとしての翻訳」を開催し、文学翻訳活動と創作活動が緊密に結びついた現代作家として、U・ヴォルフ(発表者:松永美穂)、H・ミュラー、O・パスティオール(発表者:山本浩司)、I・ラクーザ、C・ヴィラーグ、T・モーラ（発表者:新本史斉)、多和田葉子(発表者:斎藤由美子)、古井由吉(発表者:関口裕昭)をとりあげ、翻訳者=作家が切り拓く創作可能性について発表、討論を行った。本シンポジウムの成果は『創作システムとしての翻訳』(日本独文学会研究叢書第139巻)として、2020年6月中旬に電子出版物の形で公開予定である。

（４）2019年11月には雑誌『思想』(特集「危機の文学」)に論文「ヨーロッパ越境文学の新展開―ドイツ語文学を拡大するハンガリー語からの翻訳者=作家たち」を寄稿し、ドイツ語圏における18世紀以来の異化的翻訳方法の伝統、20世紀後半のドイツ語圏社会の変動と関連させる形で、中東欧圏からドイツ語圏に越境してきた翻訳者=作家たちの創作活動について論じた。

（５）2016年10月20日には、多言語作家イルマ・ラクーザの長編小説“Mehr Meer”および新本史斉による翻訳プロジェクトが、メルク社およびゲーテ・インスティトゥート主催の「メルクかけはし文学賞」第２回受賞作に選ばれ、ラクーザ氏とともに作品朗読および受賞講演を行った(於:ドイツ文化会館)。本賞副賞の1万ユーロは下記（６）の翻訳プロジェクトのために用いられた。

（６）現代ヨーロッパ越境文学を代表する作家イルマ・ラクーザの主著である『もっと、海を―想起のパサージュ』を翻訳刊行し(鳥影社、2018年1月20日)、越境作家多和田葉子による解説「海を想う」と研究代表者による「訳者あとがき」の両者を付した。ヨーロッパを細分化する領土的・言語的境界線を流動化させ、過去の歴史的記憶を立ち上がらせるラクーザの多言語文学作品の現代的意義を伝えるべく、一般読者を念頭に丁寧な翻訳、平易な解説を試みた。

（７）現代越境文学を代表する作家イルマ・ラクーザ、多和田葉子、および、ドイツ語文学研究者山口裕之、新本史斉の４名による朗読・講演会『海、想起のパサージュ』(2018年4月11日、於:東京外国語大学)を行い、現代ヨーロッパにおける<越境>のテーマについて討論を行った。さらにラクーザ、多和田、新本の3名による朗読・講演会『もっと、海を』(2018年4月13日、於: ドイツ文化会館)を行い、複数言語による執筆の創造性をめぐって討議した。

（８）『津田塾大学紀要第50巻』に論文「透明性の詩学―イルマ・ラクーザ『もっと、海を』における越境者、翻訳者、作者」を執筆し、ともすれば作者自身の「移動」と「越境」の問題に還元されて論じられてきたこの自伝的作品が、実のところ、散文、詩、頭字詩、対話劇、墓碑銘等々さまざまな表現形式を駆使して書かれた、きわめてレトリカルかつ音楽的な、ジャンル横断的作品であることを明らかにした。現代フランス文学作品、現代東欧文学作品の翻訳および批評を通じて学びとった創作手法が、ラクーザ自身の創作活動において実践的に活用されていることを、具体的なテクスト箇所に即して明らかにした。

（９）『津田塾大学紀要第51巻』に論文「反復と差異、あるいは、国境を越えない越境文学―テレージア・モーラ『奇妙なマテリアル』試論」を執筆し、ハンガリーのドイツ語マイノリティに

出自を持つ多言語作家モーラの初期短編小説集における<反復>と<越境>のモチーフについて論じた。

（10）『スイス７社による新刊書籍紹介翻訳ワークショップ』(2018年5月21日、津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス)を開催し、スイスからの出版編集者７人、日本の出版編集者18名、津田塾大学の学生12名に対して、2017-18年度のスイス新刊書籍の翻訳、解説を行い、独、仏、日本語による討論を行った。当研究代表者は企画、司会に加え、現代ハンガリー文学翻訳者であり自身作家でもあるクリスティーナ・ヴィラーグの長編小説 "Eine dieser Nächte"(『こんな夜々の一夜は』）および、ソーニャ・ダノウスキの児童文学作品"Smon Smon"(『スモンスモン』)について発表を行った。

（11）2016年7月にウィーン大学で行われた国際比較文学会において口頭発表を行った後、そこでの議論をさらに発展させた論文「『チビノヤコプリ/ジジノヤコプニ/ヨロシク/ヘディ』、あるいはフリードリヒ・グラウザーの探偵小説『体温曲線表』における言語の複数性と言語の彼岸」を『小さな国の多様な世界―スイス文学・芸術論集』(2017年6月、鳥影社、共著)に執筆した。20世紀スイスの作家、F・グラウザーとP・ビクセルにおける、多言語意識と作品創造プロセスの緊密な連関を論じている。

（12）2017年1月21日に、明治大学にて開催されたスイス文学会において口頭発表「イルマ・ラクーザにおける<langsam>の概念について」を行い、散文、詩、エッセイを通じてあらわれる、この作家における鍵概念、<langsam>の解明を試みた。

（13）2018年6月30日にスイス文学会において、研究発表「自伝と虚構―イルマ・ラクーザ『もっと、海を』を翻訳論から読み解く」を行った。

（14）2019年7月には川崎市民アカデミーにて、11月には國學院大學にて、R・ヴァルザーの翻訳と世界文学をテーマとする公開講演を行った。

（15）2017年1月28日には、ラクーザのエッセイ集『ラングザマー―世界文学でたどる旅』(山口裕之訳、共和国、2016）の書評として、「世界を、世界文学を、イルマ・ラクーザとともに、ゆっくりと歩く」を『週刊図書新聞』に執筆し、この越境作家の有する世界文学的意義について、一般読者を念頭に解説を試みた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 新本史斉	４．巻 1147
２．論文標題 「ヨーロッパ越境文学の新展開―ドイツ語文学を拡大するハンガリー語からの翻訳者＝作者たち」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『思想 11月号』	６．最初と最後の頁 86-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 新本史斉	４．巻 139
２．論文標題 「列挙、並行、反復―言語の複数性と作家の固有性の交差から生まれる創作」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『創作システムとしての翻訳』（日本独文学会研究叢書）	６．最初と最後の頁 34-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 新本史斉	４．巻 1
２．論文標題 「〈小ささ〉から生まれる世界文学―20 世紀ドイツ語圏スイスの作家ローベルト・ヴァルザーを読む」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 國學院大學文学部共同研究「スイスの多言語状況とその文化面における影響」	６．最初と最後の頁 8-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 新本史斉	４．巻 51
２．論文標題 反復と差異、あるいは、国境を越えない越境文学ーテレージア・モーラ『奇妙なマテリアル』試論	５．発行年 2019年
３．雑誌名 津田塾大学紀要	６．最初と最後の頁 77-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 新本史斉	4．巻 50
2．論文標題 透過性の詩学ーイルマ・ラクーザ『もっと、海を』における越境者、翻訳者、作者ー	5．発行年 2018年
3．雑誌名 津田塾大学紀要	6．最初と最後の頁 1-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 新本史斉	4．巻 3288
2．論文標題 世界を、世界文学を、イルマ・ラクーザとともに、ゆるやかに歩く	5．発行年 2017年
3．雑誌名 図書新聞	6．最初と最後の頁 2-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　5件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 新本史斉
2．発表標題 「並列，並行，反復―言語の複数性と作家の固有性の交差から生まれる創作システム」
3．学会等名 日本独文学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 新本史斉
2．発表標題 <Warum ist Robert Walser so wichtig, auch in Japan?>
3．学会等名 Robert-Walser-Sculpture（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 新本史斉
２．発表標題 「〈小ささ〉から生まれる世界文学―20 世紀ドイツ語圏スイスの作家ローベルト・ヴァルザーを読む」
３．学会等名 國學院大學文学部共同研究「スイスの多言語状況とその文化面における影響」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 新本史斉
２．発表標題 「スイスとドイツ、スイスとEU―小さな国の大きな国との付き合い方」
３．学会等名 かわさき市民アカデミー（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 新本史斉
２．発表標題 「スイスの文学 ―小さな国から生まれる世界文学」
３．学会等名 かわさき市民アカデミー（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 新本史斉
２．発表標題 クリスティーナ・ヴィラーグ『こんな夜々の一夜は』について
３．学会等名 スイス７社による新刊書籍紹介翻訳ワークショップ
４．発表年 2018年

１．発表者名 新本史斉
２．発表標題 ソーニャ・ダノウスキ『スモンスモン』について
３．学会等名 スイス７社による新刊書籍紹介翻訳ワークショップ
４．発表年 2018年

１．発表者名 新本史斉
２．発表標題 「自伝と虚構 - イルマ・ラクーザ『もっと、海を』を翻訳論から読み解く」
３．学会等名 スイス文学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 イルマ・ラクーザ、多和田葉子、新本史斉、山口裕之
２．発表標題 「海、想起のパサージュ」
３．学会等名 東京外国語大学総合文化研究所朗読、講演会
４．発表年 2018年

１．発表者名 イルマ・ラクーザ、多和田葉子、新本史斉
２．発表標題 「もっと、海を」
３．学会等名 ゲーテ・インスティトゥート朗読、講演会
４．発表年 2018年

１．発表者名 新本史斉
２．発表標題 イルマ・ラクーザにおける"langsam"の概念について
３．学会等名 スイス文学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 IIma Rakusa, Fuminari Niimoto
２．発表標題 Uebersetzen als Kunst
３．学会等名 第二回メルクかけはし文学賞授賞式（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Fuminari Niimoto
２．発表標題 <das junge jakobli laesst den alten Jakob gruessen>-Verdoppelung, Verstellung und Grenzueberschreitung in Friedrich Glasers Kriminalroman Die Fieberkurve.
３．学会等名 国際比較文学会（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計4件

１．著者名 新本史斉	４．発行年 2020年
２．出版社 鳥影社	５．総ページ数 400
３．書名 『微笑む言葉、舞い落ちる散文』	

１．著者名 ソーニャ・ダノウスキ、新本　史斉(翻訳)	４．発行年 2019年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 38
３．書名 『スモンスモン』	

１．著者名 イルマ・ラクーザ（著）新本史斉（訳）	４．発行年 2018年
２．出版社 鳥影社	５．総ページ数 411
３．書名 『もっと、海を－想起のパサージュ』	

１．著者名 スイス文学会編	４．発行年 2017年
２．出版社 鳥影社	５．総ページ数 250
３．書名 『スイス文学・芸術論集　小さな国の多様な世界』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

朗読会　「海　想起のパサージュ」
http://www.tufs.ac.jp/event/2018/post_1202.html
イルマ・ラクーザ／多和田葉子：もっと、海を
https://www.goethe.de/ins/jp/ja/sta/tok/ver.cfm?fuseaction=events.detail&event_id=21142763
自伝と虚構－イルマ・ラクーザ『もっと、海を』を翻訳論から読み解く
http://swisslit.org/archives/vortrag/858

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考